

令和 2 年 6 月 12 日現在

機関番号：34418

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02787

研究課題名(和文) 英語の同族目的語構文と結果構文に生じる非能格動詞の他動化に関する実証的研究

研究課題名(英文) An empirical analysis concerning transitivity of unergative verbs in English
Cognate Object Constructions and Resultative Constructions

研究代表者

大庭 幸男 (oba, yukio)

関西外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：90108259

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：非能格動詞(自動詞)を伴う同族目的語構文と結果構文の事例をBNC、COCAなどの電子化された言語データや、関係図書・論文等を用いて収集した。また、動詞ごとの使用頻度調査と文型パターンの分類を行い、基礎データを構築した。次に、非能格動詞を伴う同族目的語構文の目的語が、他動詞文の目的語の特徴(例えば、この構文の受け身文の主語になれる、代名詞になれる、wh疑問文になれる)などを含む6つの指標を用いて、この構文に生じる非能格動詞が他動詞化の度合いにおいて違いがあることを明らかにした。同じ手法で結果構文に生じる非能格動詞に他動性の違いがあることを明らかにした。中間構文についても考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本の英語教育では、他動詞は目的語をとるが、自動詞は取らないと教える。しかし、高校の教科書では、自動詞が目的語を取っている事例、例えば、同族目的語構文と結果構文が見られる。そこで、問題になるのは、自動詞は決して目的語をとらないと教えて良いか、と言うことである。

本研究では、自動詞には非能格動詞と非対格動詞があるが、同族目的語構文と結果構文に生じる非能格動詞に焦点を当てて研究を行った。その結果、これらの構文に生じている非能格動詞の中でも、目的語をとる他動詞と同じ特徴を持つ他動性の強いものからそうではないものへ、他動性に段階があることが分かった。このような事実は英語教育に役立つものと思われる。

研究成果の概要(英文)：By using language data-base such as BNC, COCA and reading the relevant books and linguistic papers, I collected a lot of examples of English Cognate Object Constructions and Resultative Constructions with unergative verbs. Then I classified frequencies of the verbs and sentence patterns including them. On basis of these, I clarified the difference in transitivity of unergative verbs occurring in these two constructions by using the indexes, which show properties of objects in the sentences with transitive verbs.

研究分野：言語学

キーワード：同族目的語構文 同族目的語 非能格動詞 非対格動詞 他動詞 副詞 他動性 結果構文

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

動詞は自動詞と他動詞に分類され、自動詞は非能格動詞と非対格動詞に分類される。しかし、この分類は決して固定化されたものではなく、構文によっては自動詞、特に、非能格動詞が他動詞として使用される場合がある。例えば、同族目的語構文には、他動詞も非能格動詞も生じる。

(1) 他動詞を伴う同族目的語構文

- a. The army fought a bitter fight.
- b. You did an admirable deed.

(2) 非能格動詞を伴う同族目的語構文

- a. John lived an uneventful life.
- b. Bill smiled a wicked smile.

(1)の動詞は他動詞だから、目的語としてたまたま動詞と形態的に関連する語(名詞表現)が生じている。

一方、(2)の動詞は自動詞の非能格動詞であり、通常は(3)のように副詞を伴う。

(3) a. John lived uneventfully.

- b. Bill smiled wickedly.

しかし、(2)の非能格動詞を伴う同族目的語構文は、動詞そのものは自動詞にもかかわらず、動詞によっては受身文を作ることができるし、同族目的語を代名詞 *it* で指し示すことができる。

(4) a. School life is lived in a society that is constituted in the course of lessons.

- b. Lisa smiled a wry smile. It was quite a litany of aggression even though on at least one count she was entirely innocent!

言うまでもなく、他動詞を伴う文は受動態にすることができる。(例えば、*John read the book.* は *The book was read by John.* にすることができる。)また、他動詞文の目的語は *it* を用いて指し示すことができる(例えば、*After John read the book, Mary borrowed it.* のように、目的語を *it* で指し示すことができる。)同じことが非能格動詞を伴う同族目的語構文でも(4)のように受動態になれるし、同族目的語を *it* で表すことができる。これにより、(2)の非能格動詞は他動詞化していると言える。

また、英語の結果構文は、主語が動詞の表す行為を行った結果、目的語がその影響を受けて、ある結果状態に至ったことを表す。この構文は目的語の結果状態を表すので、この構文には目的語をとる他動詞が用いられる。

(5) a. The waitress wiped the table dry.

- b. John kicked the door open.

しかし、自動詞の非能格動詞もこの構文に生じる。

(6) a. John ran himself to exhaustion.

- b. The professor talked us into stupor.

さらに、(6)のような非能格動詞を伴う結果構文は、次のように受動態にすることができる。

(7) a. Her Nikes have been run threadbare.

- b. We had been talked into a stupor.

したがって、結果構文に生じる非能格動詞も他動詞化していると言える。

2. 研究の目的

本研究は、同族目的語構文と結果構文に生じる非能格動詞に焦点を合わせて、次の3つの事柄

を行うことを目的とする。

- (1) a. 非能格動詞を伴う同族目的語構文と結果構文を British National Corpus (BNC)や Corpus of Contemporary American English (COCA)などの電子化された言語データやこれらの構文に関連する言語学関係の著書や論文を用いて、事例を収集する。
- b. 同族目的語構文と結果構文の事例において、非能格動詞の使用頻度と使用されている文型パターンを調査し、基礎データを構築すること。
- c. 他動詞の目的語に見られる統語的特徴（6つの指標、具体的には、受動態の可能性、目的語を代名詞で指示する可能性、目的語を what を用いて wh 疑問文を形成すること、など）と上記の基礎データを比較検討し、同族目的語構文や結果構文に生じる非能格動詞がどの程度他動詞化しているかを、動詞ごとに明らかにすること。

3. 研究の方法

同族目的語構文や結果構文に生じる非能格動詞の他動詞化の度合いを動詞ごとに明らかにするために、次のような方法で本研究を行う。

- (1) a. BNC, COCA などの言語コーパスやその他の電子化された言語資料を検索するとともに、言語学関係の著書・論文などを調査し、関連する事例を収集する。
- b. 収集した事例を使用頻度と文型パターンについて調査し、基礎データを構築する。
- c. この基礎データと他動詞の目的語の統語的特徴を比較検討し、同族目的語構文や結果構文に生じる非能格動詞について、動詞ごとの他動詞化の度合いを明らかにする。

4. 研究成果

(1)非能格動詞を伴う同族目的語構文を BNC, COCA などの電子化された言語資料を検索し、事例を収集した。次に、言語学関係の Hoekstra (1988), Horita (1995), Jones (1988), Keyser and Roeper (1984), Macfarland (1995), Massam (1990), Moltmann (1990), Puigdollers (2008), Rice (1988), Talke (1995), Tenny (1994), Travis (2012), Visser (1963), Zubizarreta (1987)などの著書・論文を精読し、事例を収集した。その後、これらの事例を動詞ごとに使用頻度を調査し、文型パターンを分類した。

(2) 非能格動詞を伴う結果構文を BNC や COCA などの電子化された言語資料を検索して事例収集を行った。また、以下のような論文や著書などを含む文献を精読し、事例収集を行った。Baker (2003), Boas (2003), Bobaljik (1998), Bowers (1997), Carrier and Randall (1992), Chomsky (2003), Chomsky (2006), Chomsky (2016), Fong, Fellbaum, and Lebeaux (2001), Goldberg (1995), Hoekstra (1988), Kayne (1985), Lasnik (2003), Levin and Hovav (1995), Rapoport (1983), Rappaport and Levin (2001), Rothstein (1985), Sportiche (1988)など。また同時に、これらの事例に生じる非能格動詞の種類と使用頻度と統語的な特徴を調査した。この調査は英語の結果構文の統語的・意味的な特徴と自動詞の他動詞化を理解するために意義のあるものである。

(3) 同族目的語構文に生じる自動詞の中には、他動性に関して程度差があることが分かった。用いた指標は、(i)受動文の可否、(ii)代名詞の置き換え可否、(iii)what などの疑問文の可否などを

含む6つである。調査の結果、この6つの指標を満たす動詞は live など、5つの指標を満たすのは laugh などであった。これに対して、smile, jumpなどは6つの指標のうち4つを満たし、scream, drinkなどは3つの指標を満たした。そして、dieなどは2つの指標、blushなどは1つの指標しか満たさなかった。このような事により、live, laughが一番他動性が強く、同じ自動詞でも、smile, jumpの場合少し他動性が弱く、scream, drinkの場合にはさらに弱く、die, blushの場合には一番他動性が弱いことが分かった。これに対して、同じ自動詞でも非対格動詞はこの構文に用いられていないことが分かった。

また、結果構文でも、自動詞である非能格動詞が目的語をとり、さらに受け身文を作り、他動性を示すことが調査によって分かった。同族目的語構文、結果構文以外に、中間構文に生じる自動詞の他動性についても分析をした。(This car sells well. / The book read easily)。具体的には、この構文の意味的な特徴や統語的な特徴を明らかにし、それに基づいてこの構文の構造を提案した。

本研究で明らかになったことは、英語教育における語彙と構文の関係を教えることにおいて意義あるものと思われる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大庭幸男
2. 発表標題 英語構文とその拡張について
3. 学会等名 日本英文学会九州支部第69大会（招待講演）
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 大庭幸男	4. 発行年 2018年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 309
3. 書名 英語学を英語授業に活かす	

1. 著者名 高見健一、行田勇、大野英樹	4. 発行年 2017年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 576
3. 書名 不思議に満ちたことばの世界	

1. 著者名 大庭幸男、丸田忠雄、菊池朗ほか	4. 発行年 2016年
2. 出版社 研究社	5. 総ページ数 303
3. 書名 言語学の現在を知る26考	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----